



林顯三編
河崎曾平閱

北海紀行

三

ル 4
3661
3



門 4
3661
卷 3

林顯三編
河崎曾平閱

北海紀行卷之三

加賀

林顯三編

河崎曾平閱

六月八日曇天 暑寒辰 午前五時檢 五十二度

午後一時檢 六十五度 東京正午 七十一度

午前六時幌別ヲ發シテ白老ニ至ル里程六里三

十二丁三十四間幌別ヨリ一里半許ニシテ

リベツト云村アリ戸數十軒許ト但モ土人旅亭ナシ

此処ヨリ山中一里許ニシテ温泉アリ入浴者ニ

奇功アリ右温泉ヨリ流レ出ル支流村端ヲ過キ

北海紀行

卷之三

昭和三十四年
三月十日
購取

テ海へ注ク幌別ヨリ此邊ニ至ル左右平坦ノ地アリト雖モ「ヤチ」地ニシテ善良ナラス此邊ハ殊ニ硫黄氣アリテ土錆テ苗色ヲナス植物ニアレ、此邊漁業ハ鮭等ノ産アリ二里餘ニシテ幌別ト白老郡ノ領境アリ此邊一面ニ萩原ナリ木萩ニシテ葉細ク草萩ニ類セス二里二十九丁餘ニシテ字ヲ「ヒンナイフト」ト云道標アリ是ヨリ白老へ四里此邊平坦ノ地ト雖モ地面尺許下タハ小嵩雜リナリ麥大豆ヲ蒔テ可ナラン此邊海崖ニ横倒レタル枯木ニ大鷲ノ棲ムヲ見ル其間

遠シト雖モ大キサ犢ノ如ク灰色ニシテ且ツ黒班アリ「ヒンナイフト」ヨリ一里ニシテ「シキウ」ト云蝦夷人ノ村アリ戸數三十軒許右ノ手前ニ川アリ「シキウ」川ト云此處ヨリ白老へ三里土人住家ノ傍ニハ必ス地上ヨリ八尺許ノ置揚臺ヲ設ケタリ以多分組立木其上ニ大約四五尺許ノ茅菅ノ小サナル家ノ様ナルモノヲ設ケ戸縮ヲナシ置ナリ是ハ土人常ニ食料魚肉ノ類ヲ入レ置ク為ナリ俚俗名ケテ土人ノ藏ト云白老村ノ手前ニ白老川ト云大河アリ水源「シキウ」

ツ岳ヨリ流レ奥深クシテ暴雨霖雨ノ折ハ二三
丁内外ノ間漲浸シ通路是カ為ニ阻梗ス此頃新
道開ケシヨリ此害ヲ除クタメニ道ヲ迂遠ニナ
シ堤防ノ設ケテリ此河ニテ秋味漁盛ナリ午后
二時白老へ著

白老

戸數十軒

會所

野口又藏

役邸一軒

土人家三十軒許

産物

鮭 鮭

カスへ

昆布

都テ此邊ノ土人ハ淳朴ニシテ古風ヲ存シ他地
ノ土人ト少シク異ナリ定ツテ食事ヲナスナク

常ニ魚獸ノ生肉乾肉ヲ食シ或ハ會所ヨリ某ノ
會所ニ至ル十里内外常ニ往来シテ終日食ヲ携
ルコトナクシテ足ル會所ヨリ使役ノタメ米ヲ與
フレハ之ヲ醴ニ醸シテ食料ノ代リニ充テ或ハ
魚肉獸肉ノ類ヲ獲レハ頻リニ之ヲ喰ヒ或ハ湯
煮シテ寐ルモ尚枕ノ邊リニ置テ之ヲ喰テ飽カ
ス都テ土人ノ男子ハ鹿裘ヲ著ス
土人ハ殆ト蠻野ニ似リト雖モ禮讓ノ篤キト狡
黠ノナキヲ以テ見レハ其性一種ノ質アリ其由
ル処ハ畢竟無欲ヨリシテ斯ノ如シ土人痘瘡ヲ

殊ニ忌ム其一郡内ニ流行スレハ其地ヲ離レテ
 山間ニ入ル若シ此病ニ罹ルハ太々重シ之レ
 常ニ肉食ヲ主トスル故ナラン顯未タ土人ノ痘
 痕アルヲ見ス若シ一家内痘ヲ患レハ忽チ其家
 ヲ自焼シテ去ル亦土人鬪争ヲナシ或ハ密夫ヲ
 ナセシ者アレハ之ヲ村長ニ告ク村長之ヲ會所
 ニ訴フヤ土人カラト云差配人番人等之ヲ判断ナシ
 或ハ仲直シニ酒ヲ吞シテ濟スモアリト云々
 都テ年分會所ニテ使役スル給料ハ日々帳記シ
 年未總決算ヲナス是ヲオムシヤト云米酒煙草

塗物着類吳服ノ類ヲ以テ決算ヲナシ敢テ金ヲ
 以テセズ此ノ決算マデハ米酒ノ類ハ使役ノ度
 數ヲ見計フテ會所ヨリ遣シ置ナリ各地會所ニ
 依リ其趣ニ差違アリオムシヤノ日ハ土人年中
 ノ祭リヲナシ酒肴ヲ設ケ各打寄村長ハ陣羽織
 ヲ着シ一坐皆古代ノ淨瑠璃ナドヲ唄ヒ頗ル愉
 快ヲ極ムト云ヘリ
 土人熊ノ子ヲ獲レハ之ヲ愛シ丸木ニテ組建タ
 ル欄内ニ容レテ養育シ大凡二十三四月ニ至
 レハ毒箭ヲ以テ之ヲ射殺シ其皮ヲ剥キ其軀ハ

埋葬シ頭ハ木ノ先ニ貫キテ之ヲ祭リ^{エナラ}テ^ナエ
テ^ハホ^ツホ^リカ^ケト^リ云^モル^ノ幣^ニ似^タリ^東京^ニヲ^立テ^酒肴
 ヲ設ケ各打寄テ酒宴ヲナス之ヲ^シソ^クク^リト
 云

土人舟ヲ造ルニ大凡長サ一丈餘幅二尺餘モア
 ル角棹一片ヲ彫彫シ兩片ヲ合セ之ヲ楡ノ皮ヲ
 以テ縫合セテ舟トナシ七尺許ノ楫二本ヲ以テ
 左右ノ手ニテ之ヲ遣フ亦妙ヲ得タリ河ニ沂リ
 濤波ニ向フテ行ニ太々速ナリ此楫ノ遣方ヲ車
 返シト云或ハ処ニ依テ大ナル丸木ヲ彫抜キテ

舟ニナスモアリ此舟ニ付一話ヲ聞ケリ先年東
 海岸^クス^リノ土人斯ノ舟ニ乗リクスリ河へ沂
 リシニ出水ノタメ突流セラレテ忽チ海上へ出
 シニ折節風波太シク漂流スルヲ數日辛フシ
 テ函館ニ著ス同所地藏町米屋某之レノ憫ミ扶
 助シテ養ヒ尚今ニ存在セリト
 此邊鹿ノ澤山ナルハ北海道中最モ盛ナル所ナ
 リ雪途ニ至テハ山間ヨリ出ル所ノ鹿二三十疋
 モ群ヲナシ海邊ノ雪際へ出テ食ヲ求ム土人之
 レヲ捕ニハ三四名謀シ合セ三方ヨリ馬上ニテ

聲ヲ掛ケ逐驅ス鹿逐レテ海へ入ルアリ以テ之ヲ獲ル多分ハ鏡砲ヲ以テ撃テリ

六月九日晴 暑寒辰 午前六時檢 五十五度 午後五時檢 六十九度 東京正午七十九度

午前七時三十分白老ヲ發シテ勇弗ニ至ル里程八里二十七丁二十八間此邊土人裸馬ニ跨リ縦横ニ驅逐ス其術亦妙ヲ得タリ或ハ夜分野ニ放シタル処ノ牧馬ヲ翌朝捕ルニ其自由亦感ス可シ一群ノ内其一馬ヲ捕スレハ餘馬ハ亦逃逸スルヲナシ馬上石筆ヲ採テ戲作ス

五六 觀蝦夷人捕牧馬戲作

倏忽見馬群疾來如走雲自山際又阜驅逐馬上獾虎鬚龍眉威鹿裘窄袖衣帶山刀一挺針髮如麻揮疾驅揚鞭來神速似奔雷縱橫作出沒數馬捕一回腰間數尺繩大喝一聲應投繫一馬首立止如俟朋

白老ヨリ二十丁許ニシテ「ヤタイ」ト云村アリ白老ト勇弗ノ領坂也土人家二十軒許同所ヨリ一里ニシテ「ベツペ」ト云村アリ土人家アリ二里ニシテ「垂舞」ト云処アリ土人家出稼茶店アリ

此邊都テ一里餘ノ処左右一面茫々タル水平原
 ト雖モ燒土ニシテ地面ヨリ七八寸下タハ植物
 生育シ難シ是ヨリ良ノ方四里許ニシテ垂舞山
 ト云高嶺アリ往昔是山ノ絶頂焰燒シテ砂石ヲ
 吹出ス方四五里許此ヨリ勇弗ニ至ル太抵ハ
 燒土ナリ信州淺間ノ燒野ニ同シ然レモトマコ
 マイヨリ彼方ハ地味漸々ニ宜シ苦小前迄白老
 ヨリ五里此邊左右凡澤或ハヤチ地多シ苦小前
 ヨリ半里許手前ニシテ小糸魚ト云処アリ人家
 五六軒萬吉ト云旅籠屋アリ苦小前ハ札幌新道

勇弗街道ノ追分ナリ此処ヨリ勇弗へ三里千歳
 へ七里此処ニ近日ヨリ驛馬繼立所ヲ定メラル
 、由茶店出稼家七八軒アリ勇弗街道へ五六丁
 ニシテマコマイト云処アリ午飯ヲ喫ス此処ニ
 テ白老ノ土人セイガイト云者馬ヲ牽来レルニ
 酒ヲ與フレハ箸一本ヲ以テ酒一滴ヲ捧ケ日神
 ヲ祭り又一滴ヲ捧テ海神ヲ祭り尚一滴ヲ捧テ
 河神ヲ祭り而シテ之ヲ吞ム從來ノ古風ナリ午
 后二時勇弗著
 勇弗 會所 函館商メ一 印山田文右衛門差配

ナリ

出稼家 三軒 役邸 一軒 土人家二十五

六軒河ノ向ニアリ

産物 鮭 鮭 鱒 カスヘ 鯨 鮫

土人細工所アリ會所ヨリ之ヲ設ケ土人ヲシテ
靴ヲ造ラセ或ハ榆皮ヲ以テ繩ヲ絢ヒ或ハ舟ヲ
造ラセ壯健ナル者漁業ノ隙ニハ此処ヘ集テ使
役シ日々ノ食料ヲ與ルナリ會所ノ東ニ勇弗河
ト云大河アリ鮭夥シ此所ヨリ沙流ヘ九里千歳
ヘ七里

白老ヨリ勇弗ヘ至ル間水平面ノ廣原ナリ就中
勇弗ノ邊ハ最モ水平面ニシテ能ク遠望ヲ達ス
此項开拓使ニ於テ洋人ヲシテ全島一圓ノ度數
ヲ測量シ地圖ヲ精詳ニセント既ニ此地ヘ發途
セリト云々

六月十日快晴 暑寒辰 午前六時檢 五十六度
午後二時檢 八十三度

昨夜十時頃ヨリ寒氣肌ニ徹シ手足厥冷ス都テ
此邊暑寒ノ度ハ日中ト日没后ト大ニ差ヲ生ス
此日午前六時勇弗ヲ發シ千歳ニ至ル里程七里

ナリ一里ニシテ字「ト」ムノシケクシヘツト云
 傍示杭アリ二里ニシテ字「ウ」ツナイト云是ヨリ
 少シ先ニ「ウ」ツナイトウト云大凡一里方許ノ大
 沼アリ此邊平面ナル地アリト雖凡多分ハ「ヤ」チ
 地ナリ三里ニシテ字「ヒ」ホフトト云四里ニシ
 テ「ウ」エンナイト云所アリ勇弗會所ノ炭焼小屋
 アリ土人家三軒アリ傍示杭ハ此処ヨリ三四丁
 先ニ建テリ之ヨリ千歳へ三里ナリ五里ニシテ
 「ヒ」イビイト云処アリ此所ニ茶店一軒アリ少シ
 先ニ勇弗ト「コ」イトイトノ追分アリ勇弗ヨリ千

歳ニ至ル間山路或ハ砂地ニシテ農耕ヲナスニ
 適宜ノ地ナシ午後二時十五分千歳へ著ス此日
 日中暑氣熾ニシテ春來未タ之ナキ暑度ナリ
 千歳會所ニ山田文右工門
 役邸ニ二軒ニ出稼家十二軒ニ土人家二十七
 軒
 産物ニ鮭三千石熊鹿
 千歳ノ河ハ會所ノ端レニアリ水源七里許ニシ
 テシユツ沼ヨリ出ツ此河秋味ノ漁業盛ニシテ
 毎歳夥多ノ魚ヲ得然レモ塩ニ乏シクシテ常ニ

漁り盡ス事能ス此地山中ニシテ海邊ヲ離ル、
七里許ト云ル斯ノ如キ河産物アリ河幅大凡二
十四間此頃開拓使ヨリ橋梁ヲ掛渡シテ從來ノ
假橋ヲ除ケリ此邊開墾ヲナスニ十分ノ地ナシ

六月十一日快晴 暑寒辰 午前四時四十五分

千歳ニテ檢 五十三度 午後三時三十分札幌ニ

テ檢 七十二度

午前五時發千歳至札幌里程十一里一丁
千歳ヨリ二里半ニシテイサリ川ト云川アリ此
処ニ土人家六軒許少シ先ニモウイサリ川ト云

アリ両川秋味夥多ノ地ナリ昨秋ハ人少ニシ
テ取餘リ川中ニ死スル魚幾多ナリト云此邊ヨ
リシマ、ツプ邊ニ至ル左右橋ノ木繁息セリ四
里半ニシテレマ、ツプト云地アリ山懐ロニシ
テ地味宜シク開墾ヲナスニ宜シ然レモ區域廣
カラス一昨年白老郡垂舞農中山久藏ナル者當
地ニ来リ地味ノ宜シキヲ見テ農耕ヲ起シ家屋
ヲ營ミ昨年ハ麥八十俵其外大小豆瓜茄子麻野
菜ノ類幾許ヲ得タリ其頃ハ未タ近在ニ人家ア
ルコトナシ當時漸々出稼假小屋ヲ營ミ茶店等ノ

備ヲナセリ就中此頃建築掛土工人夫新道傳信
 機ノ為メ百名許モ天幕ヲ用ヒ或ハ假屋ヲ營ミ
 テ此邊リニ屯集セリ之カ為ニ十五六軒モ飯店
 ヲ設ケ酒食餅肴諸品ヲ商ヒ或ハ下賤ノ賣婦ノ
 類ヲ置キ頗ル賑ヘリ近々ヨリ此処ヲ驛馬會所
 ニ定メラル、由右中山ナル者衆ニ先立チ開墾
 ノ作業ヲナスニヨリ奇特ノ趣書取ヲ以テ客冬
 開拓使ヨリ金四十圓ヲ賜リシ由昨年取揚高一
 反歩ニ付小豆一石八斗大豆二斗八升ヲ得タリ
 ト大根瓜粟麻午房ノ類別シテ肥沃セリ中ニモ

西瓜ハ目形三貫百目ノ者ヲ生ス風味モ宜キト
 云リ本縣へ送ラシカ為メ昨秋得タル処ノ麥粟
 大小豆類少許乞得ク又今朝獲タル所ノ鹿肉
 ヲ喰フニ風味宜シ此邊ヨリ山路ニ掛リ地味宜
 シト雖モ土地凸凹樹木繁生シテ開墾ヲナスニ
 ハ不便ナリ
 千歳ヨリ六里許ニシテアソシベト云所アリ土
 人家四五軒出稼茶店アリ此処ヨリ二里ニシテ
 ハシスベト云所アリ出稼茶店等四五軒アリ
 此処ヨリ少シ手前ニ平坦ノ処アリ開業ヲナス

ニ地味宜シ尚一里ニシテ月寒村ト云アリ開拓使ヨリ南部ノ農民廿五戸ヲ募移シ一昨年ヨリ大ニ開業ヲナス此節菜花盛ニシテ夏大根能ク繁肥セリ麥ノ丈ケ八寸許伍長五名ヲ置キ五戸ニ一人ヲ添ル此村入口ヨリ札幌ヲテ二里餘午后三時廿分札幌脇本陣著

六月十二日 暑寒辰 午前五時三十分 檢 五十三度 午時 檢 七十度 東京正午 七十九度

石狩國札幌郡札幌

當地ハ山際ヲ離ル、一稍遠ク石狩河へ最近キ

所四里許皆平坦ノ地ナリ最モ平面ニシテ遠キ者ハ徑十五六里ノ内外ニアリ地味肥沃萬種ノ植物繁生ス北海道全州ノ内渡島國龜田郡石狩國札幌郡右二郡開墾ヲナスニ最要ノ地トス郡中寒暖度數往々差違アリト雖モ山海ヲ去ル稍遠キヲ以テ寒威モ亦稍穩ナリ三四年前迄ハ當所ハ人家モ二三軒ニシテ餘ハ寂寞タル原野ナリシニ一昨年ヨリ爰ニ開拓使本廳ヲ置レ漸々樹木ヲ伐リ役局役邸ヲ營繕シ大ニ人民ヲ集合シ且ツ四周唇齒相扶ノ地ニ農民ヲ募移レ開墾

ヲナサシメ今ヤ既ニ一都會ノ光景アリ北ヨリ
 東ノ間ニハ石狩河ノ大流ヲ帶ヒ西ニ小樽ノ要
 港アリ南ニ函館ヨリノ新道ヲ開キ室蘭港ヲ距
 ルヲ三十里四周四達ニシテ能ク人民ヲ化育ス
 可キ地ナリ一昨來官金ヲ仰キ一時蟻集ノ徒ハ
 永世不拔ノ産ヲ立ル者稀ニシテ朝進暮退變化
 極リナレ然ト雖モ若干金ヲ私有レ或ハ活業自
 立ノ者ハ家屋ヲ盛大ニシ諸物品ヲ輸出シ商店
 ヲ宏開スルモアリ就中農民ハ多分開農ニ力ヲ
 入レ子孫永續ノ地所トス

當五月改調アリシ市中戸數六百三十四軒
 人口千七百八十五人 寄留四千七十一人
 同郡中總村數十二箇 人口二千百三十三人
 右十二箇村ハ 本札幌村 苗穂村 岳珠村
 篠路村 圓山村 琴似村 發寒村 手稻村
 平岸村 月寒村 白石村 對馬村 合十二箇
 村
 市中料店三十六戸 旅籠渡世十九戸
 薄野郭内貸坐敷渡世二十七戸 藝娼妓三百名許
 町數二十八名

本廳ハ假營ナリト雖モ此項管繕局ニ於テ本廳
 築造ノ設アリ南部ヨリ許多ノ巨林良木ヲ搬運
 シ蒸氣器械ニテ之ヲ製作シ日々工職等二百八
 十餘名ヲ役シ三階ノ西洋造ニ構成ス近日上棟
 式アル由本廳境内縱三百四十四間横二百六十
 六間總坪數九萬千五百四坪ナリ
 學校アリ資生館ト云當時生徒三十名許通塾生
 トモ
 醫學館アリ生徒三十名許官費生徒ナリ一入
 假病院兼癩毒院同局ナリ本院ノ落成近日ナル

由是亦西洋造ナリ藝娼妓毎月六度宛癩毒検査
 アリ一人一度毎ニ二十錢充検査料ヲ出サシム
 邏卒屯所是モ西洋造ナリ邏卒三十六名三員ヲ
 一組トシ合セテ十二組アリ總長一員ヲ置ク
 市會所並新聞縦覧場共ニ一局ニ置ク縦覧場ハ
 何人ヲ論セス閱讀ヲ許ス札幌市中入口ニ豊平
 河ト云アリ水源有珠ノ沼ヨリ流レテ石狩河へ
 注ク此枝流ヲ分水シテ創成町通り篠路ヲ經テ
 石狩河へ収ム是ヲ新川ト云專ラ通航ノ便利ヲ
 開ク石狩邊ヨリノ運輸物皆之レニ頼ル札幌ト

云ハ元ト土人ノ言語ニシテサチホボト云サ
 チホトハ干魚ト云義ホトハ大成ト云義ナリ
 豊平河等ニテ秋味ノ許多ニ取レタルヲ土人ノ
 家毎ニ貯ヘ有ルサマヲ云ナリ元サツボロト云
 村ハ今ノ札幌市中ヨリ十二三丁篠路往来ノ傍
 ラニアリ是札幌ノ本地ナリ

六月十三日快天 暑寒辰 午時 檢 六十八度 東

京正午 七十三度

當所ヨリ坤少ク下リニ當テ常山溪ト云山アリ
 山間ニ温泉アリ札幌ヨリ五里許常山ト云僧ノ

開基セシ温泉ニシテ諸病ニ宜シ今ハ椽籠屋三
 軒アリテ大ニ開ケタリ此温泉ノ開ケタル根元
 ハ常山諸國ヲ遍歴シ北海道ニ涉リ多年遍歴ノ
 際偶々此温泉ヲ見出シ普ク世ニ開カント願望
 止ラス或片主任官某氏常山並ニ山田屋某外一
 名都合三名ヲ集メテ曰ク近日我東京ヘ登ラン
 トス汝等ハ當所ニ久敷住馴レ常ニ當地ヲ開カ
 ント欲スルノ志アリ何ニテモ申聞クベシト云
 レシカハ山田屋某曰ク我商業ヲ開カント欲ス
 レ氏資金乏キニ因テ志ヲ達セス願クハ金二百

圓ヲ拝借シテ開業セント又一人ノ曰ク我等商
 業ヲナサント欲スレモ目途定ラス願クハ賣婦
 ヲ抱ヘ切店ヲナスノ許可ヲ得テ雇工雇夫ニ之
 ヲ鬻ント長官笑ツテ曰ク兩人ノ言ノ如キハ一
 己ノ活業ヲ謀ル而已常山カ意ハ如何常山曰ク
 拙僧ハ世外ノ者敢テ金錢ヲ望マズ商業ヲナス
 ノ意ナレ願クハ衆生ヲ濟度シ人間ニ益アルコ
 ヲ起ント長官大ヒニ其意ヲ好ミシ其事ヲ問フ
 常山曰ク我山溪ヲ巡ルノ癖アリ之ヨリ五里許
 坤ニ當ツテ山中ニ温泉アリ之ヲ開キテ諸人ノ

病惱ヲ救ハント欲スレモ金ナクカラナク其コ
 ヲ果ス能ハズ願クハカヲ添テ我意ヲ達セシメ
 給ヘト云長官大ヒニ喜ヒ之レ土地ヲ開拓スル
 ノ意ニ叶ヘリト夫ヨリ地理ヲ調ヘ道ヲ開キ橋
 ヲ架ケ浴室泊屋ヲ設ケ地名ヲ常山溪ト名ク常
 山此ニ住シテ入浴人ノ宿ヲナシ圖ラスシテ生
 活ノ道ヲ得タリト嗚呼此三人ノ目途其優劣如
 何ソヤ常山世外ノ身ナレモ其言ヤ全ク經濟ノ
 真意ニ出ツ志高尚ニシテヨク産ヲ制スト云ベ
 シ

六月十四日快天 暑寒辰 午時檢六十三度 東
京正午 七十五度

午前十時河崎並ニ札幌ノ住人石黒林太郎同行
篠路通り石狩ニ至ル元札幌村ノ傍ニ生産所ア
リ牛豕ヲ養蓄ス豕三十七頭太夕肥大皆本邦種
馬鈴薯ニ糠ヲ交セテ之ヲ飼フ牛三十二頭南部
及ヒ勇弗種鶏二百羽多分北海道種試檢ノ為メ
開ク所ノ水田アリ南部農民之ヲ作ル苗代長ケ
七八寸許此処ヨリ二里十五六丁許ニシテ岳珠^{ウカタ}
村領ニ養蠶試檢処アリ見聞ノ次第一ノ巻ニ書

ス此邊自然生ノ大木桑許多アリ大ナル者ハ廻
リ四五尺三里ニシテ篠路ニ至ル札幌ヨリ篠路
ニ至ル路傍ノ左右大抵開墾地ニシテ菜蔬能ク
繁殖ス

篠路村 戸數二十五六軒

開拓使設置ノ生産所アリ味噌醬油ヲ醸造ス昨
年官釀ノ味噌三百石許醬油二百石餘コレヲ土
地人民望ミノ者ハ低價ヲ以テ拂下ケラル當地
ハ極メテ草昧ノ地ナリシニ先キニ白川藩住民
清太郎ナル者石狩ノ地ニ来リ諸所經歷シ終ニ

爰ニ来リ地味ノ善良ナルヲ見テ始テ開農ニ志
 ス今ヨリ尚十七年前ナリ初メ清太郎舊幕府在
 勤中川金之助ノ從僕トナツテ爰ニ来リ屢石狩
 へ往来スルニ石狩邊ハ秋ノ末霜ノ降ルト太タ
 烈シ獨リ此地ハ霜ノ降ルト石狩ヨリ遅キト稍
 三十日許爰ニ於テ始テ菜蔬ノ霜害ヲ受ルノ少
 キヲ知リ耕稼ヲ起シ菜園水田ヲ試ミシニ果シ
 テ大ヒニ宜シ諸種皆肥沃ス刻苦シテ私有地ヲ
 開キ不動産業ヲ盛ニス夫ヨリ漸々人民移住シ
 今ヤ一村ノ體裁ヲナセリ札幌市中ノ新川^{シカガ}此處

ヲ通り石狩へ注ク其所ヲ篠路^ノト云フト
 テ^ト水流^云ハ落^土合^人ヲ^言ナ^ニリ當^レ處^ヨリ間道ヲ行ケハ
 篠路^ノト^一迄十五丁舟行スレハ一里十一丁餘
 當時出稼家五六軒開拓使荷揚場ナリ五六百石
 積ノ船ヲ泊ス開拓使用艦辛未九ト云河蒸氣船
 アリ發日定期ナケレモ常ニ往復ヲナス故ニ此
 地ハ水運ニ便ニシテ札幌石狩小樽等へ水脉通
 達シ本府ノ用品或ハ商品ハ小樽ヨリ此處ヲ通
 リテ達ス木村萬平運漕出店所アリ此地漸次進
 歩ノ景况他日必ス人民輻湊ノ要地トナラシ札

幌市端ヨリ當地迄新道開ケ泥淖ノ所ハ往々角
 杖ヲ敷キ道路極テ宜シ當地ヨリ石狩ヘノ陸路
 ナクシテ大ヒニ不便ナリ願クハ早ク開路ニ至
 ランコトヲ札幌ヨリ當地ニ至ル道路左右ノ樹木
 秦皮アガタモト土俗ト土俗フババ其葉ハ楓ニ似テ大ヒニ繁リタル
 者ナリ或ハ胡桃、桑、野葡萄皆繁茂セリ或ハ小桑
 ト云フ蔓幹ノ樹アリ幹ノ大ナル者廻リ二尺許
 モアリテ諸木ニ纏繞ス菓實ハ水疾病ニ妙ナリ
 此蔓幹ハ纖維粗ニシテ能ク氣ヲ透徹ス野州日
 光邊ニハ此レヲ切テ釜置トナス慈悲シヒ真鳥マウト烙

印セルモノ此木ヨリ成ル此邊地味善良ニシテ
 開墾ヲナスニ容易ナリト雖モ此ニ一ツノ困難
 アリ之ヨリ石狩河ノ上字トマ、タイト云処ハ
 豊平河ノ石狩河ヘ落合処ナリ霖雨ノ節ハ豊平
 河漲益シテモイリトウト云大沼ヘ流レ此邊地
 ノ低キヲ以テ時アツテ洪水ノ憂ヲ醸ス然レモ
 近年ハ大ヒニ此憂ヲ免レタリ今ヨリ十一年前
 霖雨打續キタル時家屋菜田ヲ流失セシコト許多
 ナリ其后ハ些少ノ患ナキニアラスト云厄害ヲ
 ナスニ至ラスト夫レ之レヲ防カンニハモイリ

トウヨリ札幌「アド」迄大約二里半許堤防ヲ造
築セハ此水損免ル可クシテ五十萬石餘ノ地ヲ
保存ス可シ他日人民稠密ニ至ラハ必ス此論ヲ
起ス者アラシ

當地永住越後商民田口金平南部農民森山無松
關多助ナト云ル者先年ヨリ農耕ニ勉勵シ此項
頻リニ開墾ヲナス同夜清太郎方ニ泊シ右等ヲ
集メテ地味ノ美惡ヲ聽クニ寒威ノ穉ナルト地
味ノ善良ナルハ石狩州中ニ於テ此地ヲ以テ第
一トス五穀菜瓜ノ能ク繁滋スル中ニモ蘿蔔瓜

ノ類ハ殊ニ熟セリト云フ

六月十五日快天 此行暑寒辰ヲ携ヘス因テ
度數ヲ知ルヲ得ス

午前六時篠路ヲ發シ同「アド」ヲ經テ石狩へ舟
行ス

夫レ石狩河ノ巨流ナルハ世皆知ル處ナリ兩岸
ノ相距ル四丁餘最深ナル處ハ十丈餘水勢上面
ハ穩流ニシテ水底ハ激流ナリ水源ハ石狩ノ岳
ヨリ出テ海岸ヲ距ルヲ一百餘里實ニ本邦第一
ノ巨流ト云ベシ往昔ヨリ其水源ヲ極タル者ナ

カリシニ安政度伊勢ノ松浦多氣四郎跋渉盡カ
シ終ニ其源ヲ究ム之レ其源ヲ知ル始メナリト
云リ水勢一度激怒スル時ハ方四五里許ノ地之
カ為ニ漲溢シ樹木郊原ヲ横流ス之レ四方皆水
平面ナルカ故ナリ

石狩河ノ末篠路ヨリ二里半許ニシテ字「ハシナ
グロト」云処アリ土人家等七軒アリ石狩ヨリ十
一二丁手前ニシテ上「ム」シ「ン」リ「フ」ト云アリ石
狩河ノ支流ナリ水路峻ナルヲ以テ通常此支流
ヲ通航ス此兩岸ニ自然生ノ菅繁生ヒリ午后三

時卅分石狩市中佐渡屋ハ左工門方ニ泊ス
石狩戸數 二百六十戸 人口 千人餘

河ノ左右共人家アリ河ノ左岸ニハ波止場並ニ
開拓使出張所暨ヒ役邸其外木村萬平出店所其
他出稼家六七軒アリ河ノ左右ニ高槽アリ舊幕
府ノ頃秋味ノ節ハ役人此槽上ニテ鮭ノ登ル多
少ヲ検査シ何分ノ税ト云フヲ定メタル由ナリ
客歳石狩河へ鮭ノ登ルト夥多ニシテ人力ノ取
盡スヲ能ハスシテ是ヲ漁ルモ塩ニ盡キ腐敗ス
ルニ及ヒシト大約客秋鮭ノ為メニ費ス処ノ塩

ノ員數一萬俵ニ下ラス然ルニ鮭大漁ニシテ塩
 不足シ初メ塩一俵一歩一朱ノ処後ニハ一兩二
 歩迄ニモ至レリト云フ
 當地春夏ハ寂寞トシテ大ヒニ不景氣ナリ是レ
 他ノ業ナキニ由テナリ然レモ秋味ノ頃ニ至レ
 ハ一時其繁華ナル事他ニ類スルナシ諸方ヨリ
 集合スル処ノ寄留人毎年二千人ニ下ラス同所
 河縁ニハ悉ク假小屋ヲ營ミ餅菓酒肴其他諸品
 ヲ鬻キ旅泊空屋ナク家婢賤娼ノ類相集リテ客
 ヲ饗ス其雜沓亦云可キナシト是カ為メ市中甚

々繁昌ナリ商家ハ都テ年分ノ利潤ヲ此時ニ得
 ル故ニ此頃ハ大ヒニ不景氣ナリト此河ノ水戸
 口ニ至レハ河幅大凡六七町許然レモ常ニ砂石
 ヲ吐出シ洪水ノ節ハ大木ヲ流出シ是カ為メ河
 口処々堆積シテ船ノ進入スル太タ習ヒアリト
 河口ニ千石積以上ノ船六艘碇泊セリ

六月十六日晴天 暑寒辰 東京正午 七十九度
 此河水海口へ突流スルニ由テ沿海之カ為ニ水
 味ヲ異ニシ他ノ漁業益ナシ唯鮭ノミヲ以テ當
 地ノ一大産物トナセリ

午前六時三十分石狩ヲ發シテ札幌ニ至ル里程
十一里二十八丁三十間

石狩ヨリ錢函ニ至ル六里十八丁ノ間皆平面砂
地ニシテ百合蒺藜ハナナ其外ノ草花滿地錦ノ如ク恰
モ秋野千草咲亂レタルニ似タリ

石狩ヨリ五里許ニシテ小樽内川アリ川幅三間
許茶店一軒アリ此処石狩國石狩郡ト後志國小
樽郡トノ領境ナリ是ヨリ錢函へ一里半札幌へ
五里十丁三十間
錢函ハ張碓ヲ係セテ小樽出張所管下ノ第三區

トス

錢函戸數 百六十九戸 人員七百二十四人

内 男 三百九十二人
女 三百三十二人

都テ此邊ハ漁業而已ニテ敢テ他ノ業ナシ是ヨ
リ小樽へ三里三十四丁ノ間多分人家陸續セリ
錢函ヨリ二十九丁三十間ニシテ手稻村ト云テ
リ此処後志國小樽郡石狩國札幌郡トノ領境ナ
リ是ヨリ二里半許ノ間ヲ總テ手稻村ト云開拓
使募移農民元ト仙臺藩片倉小十郎從屬五十戸
昨年ヨリ開農ヲナストイヘ未タ實功ヲ見ス

家屋ハ残ラス茅葺ニテ棟柱ハ繩括ナリ地味ハ
 多分宜シ然レモ前面山ヲ帯ヒタルカ故ニ霜ノ
 降ルヲ早シ是ヨリ發寒村邊ニ至ル迄山脈壘々
 トシテ霜ノ早キヲ篠路邊ヨリハ大凡一旬許早
 シト云フ

札幌ヨリ一里半許ニシテ發寒村アリ開拓使募
 移農民二十戸許アリ地開豁平坦ニシテ膏腴ナ
 リ唯霜ノ早キヲ以テ憂トス當村農長谷川何某
 ト云者昨年東京ヨリ米利堅ノ馬鈴芋三升ヲ得
 テ是ヲ種ニシ秋ニ至リ取揚高七俵ヲ得タリ風

味宜シク少シク粘氣ヲ帯ヒ甘味アリ薯蕷ニヨ
 ク似タリ國種ノ馬鈴芋ヨリハ大イニシテ一ツ
 ノ目形四百目許モアリト客年ノ比較ヲ以テス
 レハ當年ハ七百俵許ヲ得可シ大豆一反歩ニ付
 昨秋ハ六俵ヲ得タリト云フ

錢函ヨリ四里十丁餘ニシテ琴似村ト云アリ募
 移農夫二十五戸許アリ此邊都テ平坦ニシテ地
 味宜シ琴似川此処ヲ流通ス此川秋味ノ登ルヲ
 盛シナリ
 札幌ヨリ二十丁許手前ニ圓山村ト云アリ募移

農夫盛シニ開耕ヲナス手稻村邊ヨリ札幌ニ至
 ルノ間追々私有地ヲ標シ家屋ヲ設ルノ勢ヒア
 リ別シテ此圓山邊ハ大ヒニ開耕ノ勢ヒヲ得タ
 リ夕五時頃札幌創成橋通小野吉兵衛方ニ投宿
 六月十七日晴 暑寒辰 午時檢 七十四度
 終日鹿肉ヲ切テ河崎ト俱ニ往事ヲ談ス
 六月十八日曇天折々微雨 暑寒辰 午時檢 六
 十八度 東京正午 七十六度
 河崎ハ明朝本縣へ還ントス顯ハ柯太跋渉ノ事
 ヲ約シテ午后離別ノ宴ヲナス蜂腰ヲ詠シテ送

別ノ情ヲ述フ

君ト我道ハ二ツニワカルトモ赤キオモヒハ
 タ、一筋ニ

八百日行ク君カ船路ノ波風ハ唯スクヨカト
 祈ル計リソ

醉中之吟

豪氣衝天怒浪鳴 樽前截肉慰離情

北夷從此須深入 何日到窮彼得城

六月十九日曇天 暑寒辰 午時檢 七十一度 東

京 七十四度

午前六時河崎發途本縣ニ還ル馬頭ニ一詠ヲナス

波荒キ蝦夷ノ千島ノ友千鳥ヒトリ残りテ音ヲノミソ待ツ

石狩河ノ河上トウベツ川ノ奥ニトウベツト云地アリ土地善良ニシテ地平カナリ寒威稍穏ナリ先年兵部省支配ノ時ニ當ツテ其地ヲ開墾セント評議アリシニ己己ノ兵擾ニ由ツテ其事廢セリ昨年ヨリ元ト仙臺藩伊達英橘元伊達山正家若手城一代旧石從屬ヲ率ヒ盛ニ開耕ヲナセリト聞ク尚

有司ニ就テ事實ヲ聞クニ果シテ然リ

六月廿日微雨午后折々晴 暑寒辰 午時檢七

十一度 東京 七十四度

或人柯太ノ地嚴冬ノ節ハ土人ノ鬚凍リ冰條垂リテ室内ニ入ルニ尚カラ、ト鳴ルト余鬚ノ凍ルハ左ノミ珍ラシキニモアラス我郷地ナト嚴冬ノ節野外ヲ行クニ寒風太シキ時ハ鬚髮ニ冰柱下リテ音スルヲアリ亦王元羨カ詩ニ

風劈面疑裂凍粘鬚有聲

午后一時頃ヨリ市外ノ郊野ヲ散歩シ豊平河ヲ

渡リテ左方ニ開墾ヲナスニ宜シキ地アリ平坦
ニシテ區域廣シ樹木繁生スト雖モ地味太々宜
シ此邊ニ開拓使雇工ヲ住セシムルカ為ニ設ル
ルノ長家アリ午后五時歸宿

六月廿一日微雨 暑寒辰 午時檢 六十二度

六月廿二日霪雨少シク寒味アリ 暑寒辰 午
時檢 五十八度 東京 七十四度

此日曇天終日々光ヲ見ス午前七時札幌ノ元本
陣石黒林太郎庄内人櫻井誠一郎同行ニテトウ
ベツ川ノ川上伊達英橘カ開耕ノ地視見ノ為メ

札幌ヲ發シ午時篠路邑早山清太郎方へ著ス此
ニテ午飯ヲ喫シ飯、塩、噌、鍋ヲ調度シ小舟一艘ヲ
借り楫取兩名常松芳太郎ナル者ヲ雇ヒ夫々支
度シ大約四日間ノ用意ヲナシ午後一時四十分
篠路ヲ發舟スフレコサツポロトハ元ト札幌ニ
云フ義ナリ篠路ブトウニ引續キタル処ニシテ
メ一印商秋味ノ漁場アリ二十丁許川上ニシテ
字下「トイト」云此間兩岸木賊ノ長ケ三尺許ナ
ル者粟散ノ如ク繁生セリ「ブトウ」ヨリ一里半計
ニシテ上「トイト」云アリメ一印秋味運上屋ア

リ「フトウヨリ三里餘ニシテ」トウベツ「フトウニ
 至ル此時日既ニ夕陽ニ傾キ時辰七時ヲ表ス此
 邊人家ナク叢棘ヲ踞シキ苦ヲ敷キテ茵トシ石
 ヲ集メテ爐ヲ圍ヒ五人圓居シテ飯ヲ炊キ乳母
 百合草ノ根ヲ堀テ汁トナシテ之ヲ喰フ風味亦
 羨ナリ唯終夜蚊蚊ノ盛ニ來テ肌ヲ刺蝨スル
 カ為メニ安眠スル能ハス日中石狩河ヲ泝ル節
 鶯或ハ見馴ヌ衆鳥細ヤカニ囀スルアリ或ハ西
 岸ノ柳絮亂レテ雪ノ散レルニ似タリ同行ノ櫻
 井舟中ニテ詩アリ

蕩舟漫登石狩川 柳岸鶯聲促睡眠
 借問行程當別事 夕陽到處有人煙

和韻

顯

兩岸柳鶯利涉川 夏天却是促春眠

此行不為桃源興 拓地移人見暖煙

六月廿三日晴 暑寒辰 東京正午 七十五度

午前五時三十分「フトウ」ヲ發シテ「トウベツ」川ニ
 泝ル川上一里許ノ間地味太タ宜シク萬草長茂
 シ長ケ七八尺ニモ及フ併シ水損ノ患眼前ニア
 リ兩岸ノ樹枝水上ヨリ一丈許モアル処へ草根

類ノ打掛リタルハ暴水ノ侵セシ徴ナラン此川
 鮭ノ登ルコナシ總レテ北海ノ各地細流ナルモ
 鮭ノ登ラサルナシ獨リ此川ニ登ラサル所以ハ
 是レ水源鍍鑛ノ氣アルノ徴ナラン流末ノ砂石
 亦鍍氣ノ徴ヲ含ム此川^{ウツリ}鹹ヤマシベアサリノ類
 ハ化育ス此魚類ハ金属ノ酸氣ニ多ク觸サルニ
 ヨル者ナラン兩岸ニ繁茂スル処ノ樹木ハ多ク
 柳^{アカ}秦皮^{タモ}胡桃^{クルミ}ナリ中ニモ山葡萄ノ延蔓セル諸
 樹ニ纏ハサルハナシ其蔓幹廻リ二尺許ノ者間
 々アリ衆鳥ノ囀スル声耳ニ誼シク中ニモ^{クロハ}黑鶇^{ツグミ}

シナイ四十雀^{ヤチウヅ}芳原雀^{ヨシノ}鷓鴣^{シメジ}其外種々奇鳥ノ声ヲ
 聞クト雖モ其名ヲ知ラス同行ノ人ニ問ヘテ亦
 然リ此川ノ川上トウベ^ツ山ヨリ良材ヲ出タス
 槐トハ松ノ類大幹ニシテ長ケ二丈餘モアル者
 ヲ山上ヨリ伐リ出シ此川ヨリ石狩ヘ流カシテ
 之ヲ鬻クニ莫大ノ金高ヲ得ル先年兵部省支配
 ノ節此地ヲ開拓セント樹木ヲ伐ラシメ其手ヲ
 下タサントセラレシナレテ己己ノ兵災ニテ其
 功業止ミタリ今ニ其伐木折々河間ニ掛レリ當
 別^アト^トヨリ四里餘川上ニシテ伊達英橋カ開

墾所アリ從屬九十一戸ヲシテ茅藁ノ家ヲ作り
木ヲ伐り地ヲ拓キテ穀類瓜菜ヲ培育セリ各戸
開墾地大凡二三反歩ヨリ多キハ十反歩許ヲ耕
ス地味宜シク粟、稗、麥、麻、馬鈴薯、胡瓜、茄子、午房ノ
類ヲ植付タリ漸ク昨年ヨリシテ拓キシ地ナル
カ故ニ未タ開拓十分ナラス且ツ此地夏日炎天
打續ケハ河水減少シテ通船スル能ハス亦陸行
ノ通路ナク近頃伊達氏從屬ヲシテ石狩ヘノ小
徑ヲ開クト雖モ馬足及ハス獨歩ヲ以テ僅ニ通
スル程ノ道ナリ嚮キニ伊達氏ハ空知郡ノ地ヲ

官ヨリ借受ケタリシニ空知ハ太タ邊陲ニシテ
昨年其地ヘ赴クト雖モ通路不便且ツ石狩ヲ離
ル、ト數十里ナルヲ以テ更ニ再願シテ此地ヲ
有セリ此地大ヒニ物産蕃殖スト雖モ他方ヘ運
輸スル能ハス唯一戸ノ活計ヲ謀ルノ地ナラン
若シ大ヒニ費カヲ盡シ更ニ新道ヲ開キテ石狩
ヘ通達シ之レヲ輸出スルニ至ラハ亦有益ノ地
ナルベシ伊達氏ハ此地ヲ墳墓ト定ムルノ意ナ
リ
午後四時后此地ヲ發シテ石狩河ニ至ラント下

ルコ三里餘ニシテ日既ニ没シ薄暮ニ舟ヲ急カ
シテ昨夜泊セシ露宿ニ還リ飯ヲ炊キテ食ヲ喫
ス眠ラントスレニ蚊ノ責来ルコ前夜ニ異ナ
ルコナシ

六月廿四日曇暉少シク寒味アリ

午前五時三十分此処ヲ發シテ篠路ニ至ルコト
ウヨリ二里許ニシテ川上ニガマヤウスコト云
アリ地味善良ニシテ水損ノ患ナク境域極メテ
廣シ此処ニ土人家一軒アリ都テ石狩ノ河縁土
人住セル地ハ從來水損ノナキ地ヲ擇ミテ住メ

リ故ニ土人ノ住セル地ノ邊リハ水害アルコトナ
シト楫取ノ者話シケリ午時頃篠路ニ到リ午后
五時二十分札幌ニ歸着ス

六月廿五日曇天折々微雨 暑寒辰 午時檢六
十一度

島中日用ノ米ハ曾テ地産ノモノ無シト雖モ海
路ノ便ナルヲ以テ秋田ヨリ輸入スルモノ甚々
多シ故ニ他所ニ比較スレハ其價却テ廉ナリ又
常野ノ間ニ種ル所ノ俗ニ岡作リト云米種ヲ當
年支廳ヨリ三拾石買入レニナリ來年之レヲ農

民ニ與ヘテ種シムル由シ

六月廿六日曇天微雨 暑寒辰 午時檢六十五

度

過日近郷野外ヲ巡視セシ處へ再ヒ散步シ土地ノ景況ヲ熟觀シ午后四時後歸宿ス

北海紀行卷之三終

